### 1. 研究背景

arXiv: 1412.6877

#### 背景1.なぜ『強い磁場』を考えるのか?

A1. 温度/密度以外の極限状態でのハドロン物理はどのように振る舞うのか?という理論的興味

A2. 現実世界に強い磁場が**存在する可能性**がある

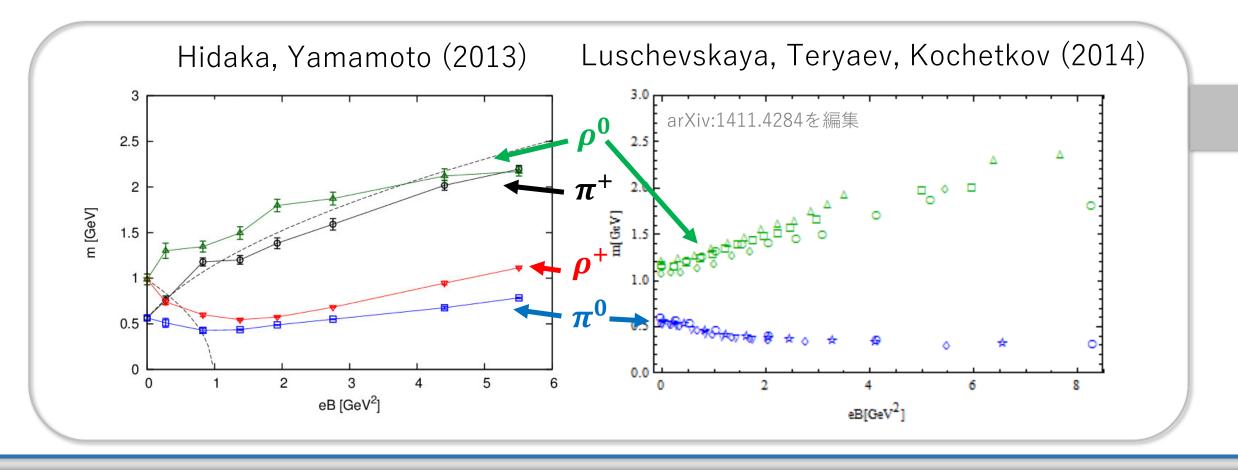
A3. 符号問題がなく、格子計算が実行でき、非自 明な現象が発見され始めている

(Inverse-)Magnetic Catalysis, qq-potentialの非対称性, 軽いメソンの非自明な磁場依存性...

#### 例1 高エネルギーイオン衝突 例2 中性子星の内部 例3 初期宇宙(電弱相転移) Kharzeev, McLerran, Warringa (2007) Skokov, Illarionov, Ferrer, Incera, Keith, Portillo, Toneev (2009) Vachaspati (1991) Enqvist, Olesen (1993) Springsteen (2010) Deng, Huang (2012) $eB \lesssim 10^{20} G$ $eB \sim 10^{18-20} G$ $eB \sim 10^{23} G$ $\sim (1-10 \times \Lambda_{\rm OCD})^2$ $\sim (10 \times \Lambda_{\rm OCD})^2$ $\sim (100 \times \Lambda_{\rm QCD})^2$

#### 背景2.なぜ『ハドロン質量』を考えるのか?

**A.** 格子計算によれば、軽いメソン $(\pi, \rho)$ の質量は**非自明な磁場依存性**を持つが、それがなぜか**よくわかっていない** 



 $ho^0$ , $\pi^+$ :  $\sqrt{eB}$  で増える  $ho^+, \pi^0$ : 弱い磁場依存性

 $ho^0 \sim \pi^+ > 
ho^+ \sim \pi^0$ 

× ハドロン有効模型で再現できない

Chernodub (2010)

× 物理的な起源は不明

#### 2. やりたいこと

格子の結果を簡単に説明する模型の構築

2 軽いメソン以外のまざまなハドロン質量の**予言** 

#### 3. 模型

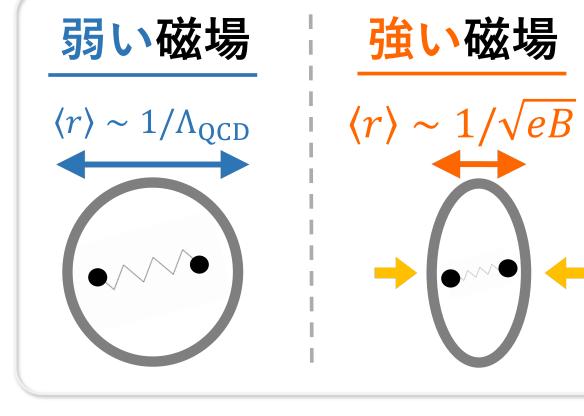
#### 模型が取り込まねばならない要素

- 1. クォークの自由度
- 2. SU(6)=SU(3)<sub>flavor</sub>⊗SU(2)<sub>spin</sub>対称性の破れ

弱い磁場 ハドロンの基底状態は、SU(6)対称性:  $M_{u\uparrow} = M_{u\downarrow} = M_{d\uparrow} =$  $M_{d\downarrow} = M_{s\uparrow} = M_{s\downarrow}$ を尊重するように構成される Gell-Mann (1964) Zweig (1964)

クォークは磁場と結合し、**クォーク質量は電荷とスピンを通** 強い磁場 **して、磁場に依存する**(Landau準位) i.e., SU(6)対称性は壊れ て、 $M_{u\uparrow} = M_{u\downarrow} = M_{d\uparrow} = M_{d\downarrow} = M_{s\uparrow} = M_{s\downarrow}$ は成り立たない

3. ハドロン体積の縮小(閉じ込めポテンシャル)



4. 計算結果

ハドロン内のクォークの運動は磁場により、 横方向に強くsqueezeされる(ハドロン体積 の減少)

⇒閉じ込めの質量への 寄与  $\Delta V_{$ 閉じ込め  $\sim \sigma \langle r \rangle$  は減少

#### 具体的な模型

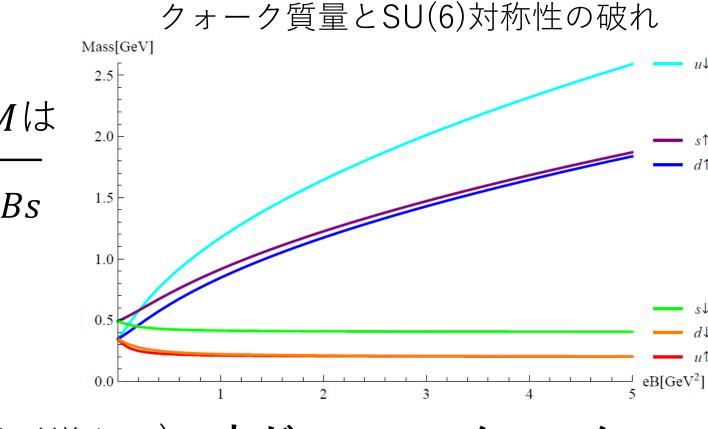
 $H(\mathbf{r}) = \boldsymbol{\alpha} \cdot (-i\nabla - \mathbf{\vec{q}}\mathbf{A}) + \beta V(\mathbf{r})$ 1粒子Hamiltonian  $V(\mathbf{r}) = \sqrt{m^2 + \sigma^2 r^2}, A = \frac{D}{2} \mathbf{e}_{\theta}$ 

に従うクォークから構成されるクォーク模型

この『クォーク模型』とは、「<math>クォークの従うDirac方程式 $H\psi = E\psi$ をちゃん と解き、その最低エネルギー固有値Mを用い、ハドロンの基底状態を正しく構 成することで、ハドロンの質量 $M_{Hadron} = \sum M_{quark}$ を求める模型」という意味

## トハドロンの基底状態

Dirac方程式から最低エネルギー固有値Mは  $M(B) = \sqrt{m^2 + \sigma + 2\sqrt{\sigma^2 + (qB/2)^2} - qBs}$  $\sim \begin{cases} \sqrt{m^2 + \sigma + 2|qB|} & qs < 0 \\ \sqrt{m^2 + \sigma} & qs > 0 \end{cases}$ 



 $\blacksquare$  qs < 0 のクォーク $(\sqrt{2|qB|}$ 程度で質量が増える)の方がqs > 0のクォーク

(磁場依存性は弱い)より重い

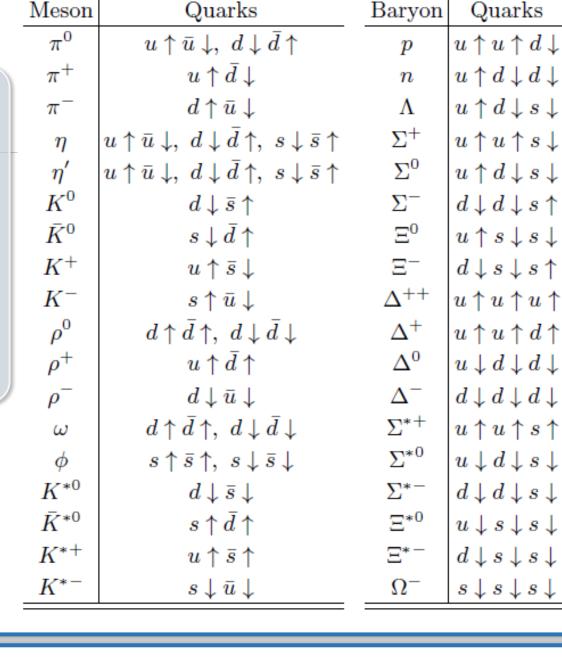
1 ハドロンの基底状態は、その量子数を満 たし、qs > 0のクォークが最大限多くな るように構成される

2 ハドロンの質量は qs < 0 のクォークの 数の分だけ $\sqrt{2|qB|}$ 程度で増える

例)  $\rho^+$ 中間子

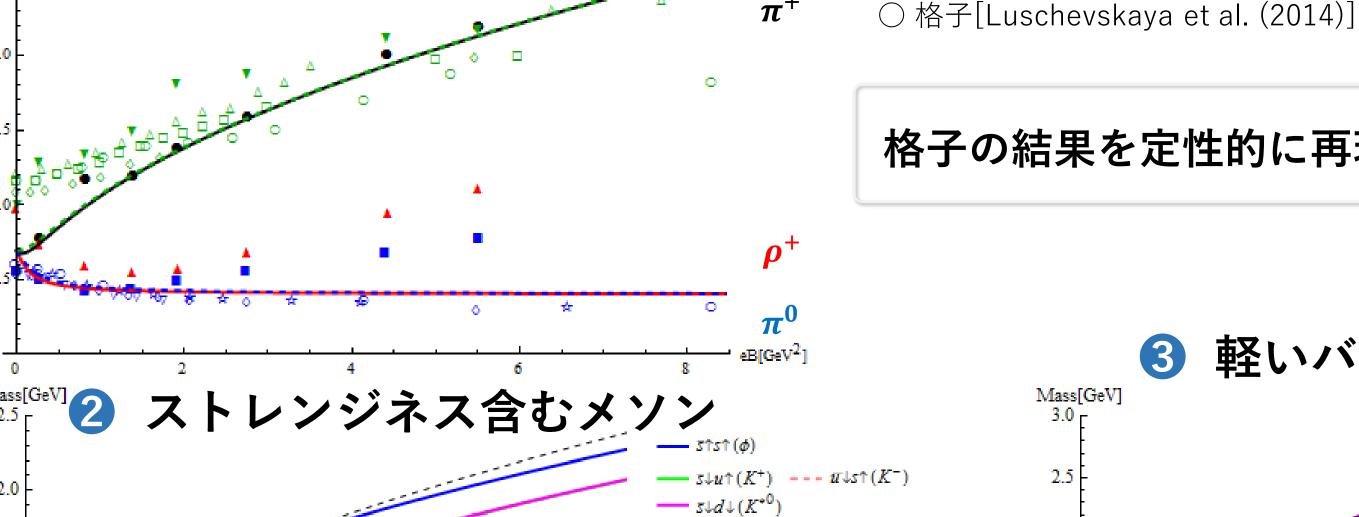
 $---d\downarrow d\downarrow d\downarrow (\Delta^-)$   $---u\uparrow u\uparrow u\uparrow (\Delta^{++})$ 

 $u \downarrow \bar{d} \downarrow > \frac{u \downarrow \bar{d} \uparrow \pm u \uparrow \bar{d} \downarrow}{\sqrt{2}} > u \uparrow \bar{d} \uparrow$ 



 $---d\downarrow d\downarrow s\downarrow (\Sigma^{*-}$ 

# ① 軽いメソン



格子の結果を定性的に再現!

● 格子[Hidaka, Yamamoto (2013)]

- 3 軽いバリオン  $u \uparrow u \uparrow d \uparrow (\Delta^+)$ 
  - 4 ストレンジネスを含むバリオン *u* ↓*s* ↓*s* ↓ (Ξ\*0)  $u \downarrow d \downarrow s \downarrow (\Sigma^{*0})$ d↓s↓s↑(Ξ¯)  $d\downarrow d\downarrow s\uparrow (\Sigma^{-})$   $---u\uparrow u\uparrow s\uparrow (\Sigma^{*+})$  $-u \uparrow d \downarrow s \downarrow (\Lambda^0, \Sigma^0) - - u \uparrow u \uparrow s \downarrow (\Sigma^+)$